

# 近世哲学研究

## 第 15 号

---

- 意志の無限後退論  
——ライルと意志理論——  
—— 久呉 高之 1
- 歴史・時間・事実  
—— 哲学史研究のための予備的考察——  
—— 福谷 茂 24
- 無制約者と知的直観（二）  
—— 『ティマイオス註解』から『自我論』へ——  
—— 浅沼 光樹 46
- 

2011

近世哲学会

## 編集後記

本年も無事に『近世哲学研究』第一五号をだすことができた。貴重な研究時間を割いて編集実務に当たってくれたドクター在学中の方々、執筆にご多用中の時間を練り合わせていただいた先生方には篤くお礼申し上げます。特に久呉高之先生には、東日本大震災のさなかに玉稿をいただくことができたことに深い感謝と敬意を表させていただく次第である。

なおオンラインの研究室紀要『PROLEGOMENA』第二号を送り出したこともご報告申し上げます。

ことしの特殊講義で一七世紀の形而上学を取り上げた。ライプニッツ、スピノザ、マルブランシュの書いたものに触れているうちにあらためて印象が深かったのは、彼らは非常に狭いサークルのうちで活動していることである。マルブランシュとスピノザは会見していないが、ライプニッツとスピノザ、マルブランシュとライプニッツは実際に面会したことがある間柄である。たとえばライプニッツの書いたものだけ読んでみると、いかにも独創的な考え方に思われることが、三人（さらにアルノーも入れて四人にすると面白い）の書き物を照らし合わせると、共同制作とまではいかないものの、彼らの間でキャッチボールされ共有されている考えがコアにあって、それに各自が手を加えることで個性的なものへと仕上げている、というあり方が透けて見えるような気がする。出来上がって世間に

提示された、そして哲学史の教科書に現われた姿としてはまったく独自の世界を形成しているように見えるものの、それは事柄の半面に過ぎないことを感じたのである。これをカントおよびドイツ観念論の哲学者たちと比べると、そこには著しいコントラストがある。

こちらの哲学者たちはいわばクロードな世界を形成することに腐心している。これに対して一七世紀の哲学者たちは、独創的な概念のプライオリティや他の哲学者との差異化を第一の目的にはしていない。大幅に違う哲学的な立場と背景にもかかわらず、彼らはなにか相手が受け入れられるものを、相手と共有できるものを、求めているのだ。

これは私にとって新鮮な発見だった。どの一人かを中心にしてというのではなく、彼らが形成する場そのものを対象とした研究もあっているのではないかと、という気がする。たとえば Steven Nadler の *The Best of All Possible Worlds, 2008* はそのパイオニアだと思うが、私たちの身近でもこういうタイプの研究が現われることを期待している。

最後になったが、菌田坦名誉教授が日本学士院会員に選出されたニュースがあった。「西洋近世哲学史」という文字が紙面に舞ったことはたいへん溜飲のさがったことである。心からお祝い申し上げますとともに、先生の一層のご活躍をお祈りし、なにより引き続きご指導を賜ることをお願いする次第である。

(F)

## 『近世哲学研究』（既刊目次）

### 第一号（一九九四）

- 祝辞 酒井 修  
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦  
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——  
カントと初期フイヒテとの接点 北岡 武司  
義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄  
—— 功利主義との対比 ——  
仮象と反省 山脇 雅夫  
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——  
カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂  
—— 「世界」概念導入のための  
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論

早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた  
ヘーゲルの試み ——

工学はどういうタイプの学問か

齊藤 了文

信仰の情熱とその逆説

田中 一馬

—— キエルケゴール『おそれとおのき』  
におけるアブラハム解釈をめぐって ——

ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志

—— 意識の二義性と意識の転換 ——

### 第三号（一九九六）

- 『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫  
読書人世界から学者共和国制度へ 福田喜一郎  
—— 理性を制度化しようとした  
カントの試み ——  
デカルトにおける愛の区別について 武藤 整司  
未済の人倫 石田あゆみ  
—— 『精神の現象学』主奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

### 第四号（一九九七）

- 一本の綱 (Sei) としての人間 吉川 康夫  
—— ニヒリズム状況下に於ける  
人間と社会の問題 ——  
デカルトの懐疑について 安藤 正人  
—— 『省察』の「反論と答弁」を  
資料として ——  
市民と国家の媒介 小川 清次  
—— 「国民」形成の側面 ——  
『存在と時間』に於ける可能性概念の  
多義性について 橋本 武志  
自然主義的存在論の隘路 次田 憲和  
—— フッサールの「領域的存在論」における  
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——  
「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司  
—— デカルト的行論の一考察 ——

### 第五号（一九九八）

デイルタイに於ける客観的精神の概念  
について 折橋 康雄  
ハイデガーの他者論 安部 浩

### 第六号 (一九九九)

デカルトにおける《真理》と《存在》  
倉田 隆  
—— 明晰かつ判明に知得されるもの ——  
ヘーゲルの根拠論 山脇 雅夫  
—— 知と存在との相即 ——

「第五省察」の隠された論理 次田 憲和  
—— フッサール『デカルト的省察』における  
「他者構成論」理解のための一視座 ——  
シェリング哲学の出発点 浅沼 光樹  
—— 人間的理性の起源と歴史の構成 ——

### 第七号 (二〇〇〇)

—— 菌田 坦教授 退官記念号 ——  
菌田 坦教授 略歴・業績一覧  
《講演》  
近世哲学における神の問題 菌田 坦

近世哲学とはなにか 福谷 茂  
—— 新しい哲学史像のために ——  
人間の輪郭 武藤 整司  
—— その曖昧さを擁護するために ——

知の自己吟味 山脇 雅夫  
—— 『精神の現象学』緒論における  
知と即自の区別について ——  
ハイデッガーの良心論再考 橋本 武志  
—— 可能性概念を手がかりに ——  
生と音楽 折橋 康雄

—— デイルタイに於ける  
生と音楽の時間性的問題をめぐって ——

### 第八号 (二〇〇二)

自由の軌跡 北岡 武司  
—— 批判哲学における  
自由の可能性の意味 ——  
認識か解釈か 福谷 茂  
—— 新しい哲学史像のために (二) ——

G・ハーマン 相対主義説の論理  
田中 一馬  
歴史的理性の生成 浅沼 光樹

—— シェリング『悪の起源』における  
神話解釈の意義 ——

《書評》  
北岡武司著『カントと形而上学―物自体と  
自由をめぐって』 橋本 武志

N・ケンプ・スミス著(山本冬樹訳)『カン  
ト『純粹理性批判』註解』 長田 蔵人

### 第九号 (二〇〇二)

『存在と時間』と哲学の方法(形式的挙示  
再考) 田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生

ウイトゲンシュタインの「規則に従う」論  
榊原 哲也

の若干の考察 子野日俊夫

復古のもとでの立憲主義 竹島あゆみ

—— ヘーゲル法哲学講義(ベルリン  
一八一九/二〇年)の二つの講義録 ——

《書評》  
ヤーコプ・バーム著(菌田 坦訳)『アウロー  
ラー明け初める東天の紅』 福谷 茂

第一〇号 (二〇〇三)

十年の歩みを顧みて 藪田 坦

デカルトと自覚の問題 実川 敏夫

——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐる 高田 珠樹

——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節 (decorum) の意義

福田喜一郎

——クリスチャン・トマージウスにおける

法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」 西川小百合

——カントの道徳判断論の

新しい理解を目指して——

《書評》

福居 純著『デカルト研究』 浅沼 光樹

第一一号 (二〇〇四)

カントにおける崇高の経験 牧野 英二

イデオロギー批判の技術哲学 橋本 武志

——マルクーゼ・ハーバーマス論争を

手掛かりに——

感性の弁護 (Apologie für die Sinnlichkeit)

とは何か

長田 蔵人

——カントの「直観」概念の

見過ごされたアスペクト——

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

——その内実と意義——

千葉 清史

《書評》

武藤整司著『人間の輪郭——共生への理念』

吉川 康夫

第一二号 (二〇〇五)

形而上学的認識と超越論的認識

大橋容一郎

——カントと認識の形而上学・序論——

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか

冲永 荘八

——私に付属する性質が消去された視点

からの考察——

反現象学之道

次田 憲和

——フランツ・布伦ターノにおける非超越

論的現象学と個体主義的存在論に基づく

直接実在論的認識論について——

超越論的反省とは何か

佐藤 慶太

——「反省概念の二義性」章の三段構造と

その意味——

第一三号 (二〇〇六)

根拠律批判から理性批判へ 石川 文康

——「ア・プリオリな総合」の起源を

めぐって——

ショーペンハウアーにおける「物自体とし

ての意志」概念の導入 多田 光宏

——意志の否定と道徳の両立のために——

《書評》

三つの『純粹理性批判』新訳 佐藤 慶太

第一四号(二〇一〇)

ヒュームの認識論についての覚え書き

小林 道夫

——デカルトの認識論との対比において——

ライプニッツの創造論(一) 福谷 茂

無制約者と知的直観(一) 浅沼 光樹

——『テイマイオス註解』から

『自我論』へ——

編集委員会

委員長  
委員

福谷 茂  
稲岡 栄次  
川崎 倫史

## 執筆者紹介

久呉 高之 いわき明星大学教授  
福谷 茂 京都大学教授  
浅沼 光樹 京都市立芸術大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第15号

2011年12月25日 発行

編集・発行 近世哲学会  
編集代表 福谷 茂  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部  
西洋近世哲学史研究室内  
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>  
TEL (075) 753-2444

印刷所 大学生協京都事業連合  
ブックプリントセンター  
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町 23-3  
TEL (075) 711-3839

定価 1200 円(本体 1143 円)

STUDIES  
in  
MODERN PHILOSOPHY

No. 15

---

- Takayuki KUGO : Infinite regress arguments of the will 1  
—— Ryle and volitional theories ——
- Shigeru FUKUTANI : History, Time and Fact 24  
—— Preliminary Considerations for the Historiography  
of Philosophy ——
- Kouki ASANUMA : Das Unbedingte und die intellektuelle Anschauung 46  
—— Vom *Timaios-Kommentar* zur *Ichschrift* ——  
Zweiter Teil
- 

2011

Published by  
Society for the Researches  
in the History of Modern Philosophy